

ピップと二人の男たち Pip and Two Men

奥田 真由子
Mayuko OKUDA

『大いなる遺産』は従来多くの研究がなされてきた。それらの多岐にわたる批評群において、語り手兼主人公ピップとマグウィッチによる擬似父子関係に注目するものは少なくない。確かにマグウィッチはピップの父親の墓石の側から突如姿を現し(Hutter 95)、その数年後にはマグウィッチ自らピップの「二番目の父親」(320)と名乗る点からも、彼らの擬似父子関係は論じるに値する。そして彼らの関係を考察するにあたり、もう一人の父親代わりといえるジョーとピップの関係もまた、必然的に比較対照されている。例えばバーナード(Barnard)は、ジョーを「真の父親」、マグウィッチを「虚偽の父親」と表現し、本作品はジョーからピップを取り上げ、彼を誤った目的地に導く虚偽の父親の力を中心に展開すると定義する(248-49)。またサドリン(Sadrin)は、ピップが抱える父親探しと父親殺しの願望に言及し、ジョーとマグウィッチに対するピップの言動の意味を読み解く(95-111)。そしてタロン(Talon)はピップの語りの道程を、息子のようにマグウィッチを救うことで罪を乗り越え、親不孝な息子のようにジョーに許しを請うものだと結論づける(132)。

しかしジョーとマグウィッチは、各々ピップと擬似父子関係を築くだけの間柄ではないだろう。デスナー(Dessner)はピップの父親探しと父親殺しの動向を解きつつ、マグウィッチの「おまえ(ピップ)は決してわしを見捨てなかった」(459)という言葉に、ピップのジョーへの忘恩行為が響いていると指摘する(447)。そして田辺氏は、マグウィッチがピップとの別れ際に発する“Good night”(379)という言葉が、作品終盤でジョーに再現された瞬間、「沼地で結ばれた三者(ピップ、マグウィッチ、ジョー)の絆が蘇る」と論述する(287-88)！つまり1度だけ言葉を交わしたにすぎないジョーとマグウィッチに、作品終盤までピップに影響を及ぼすつながりが認められるのである。だがそのつながりとは具体的にどのようなものなのか。そしてもしジョーとマグウィッチに永続的な絆があるのなら

ば、ピップを交えて三者の間に、今まで見過ごされてきた別の相互関係が隠されているのではないだろうか。そこでこの小論では彼ら三人が互いに及ぼす隠された役割とその関係について検討する。特に彼らが一堂に会する場面と、それにいたるまでの過程を描いている冒頭6章に焦点を当てる。そしてそれらの章がこの小説の主題に深く関わる重要な位置を占めていることを明らかにしたい。

全編を通してジョーとマグウィッチが直接顔を合わすのは、1度のみである。その上彼らの会話はマグウィッチが盗みの咎めからピップを解くことが主旨となっている。そのためピップとマグウィッチの出会いから脱獄囚捕獲騒動までの最初の6章は、ピップとマグウィッチの人生を論じる際に注目されやすい。しかしハガン(Hagan)はそれら6章における温かい屋内と惨めな戸外の沼地という二つの世界の混在を指摘し、それらを圧制者と被圧制者の世界とみなす。そして犠牲者といえる被圧制者を、圧制者は人生から締め出すことはできない、と述べる(62)。これらの点を考慮すると、第1の囚人追跡劇は、「避難所である家屋」(10)を持つジョーと沼地の中を逃亡するマグウィッチの立場の差異を明確に描写し、さらにピップの以降の人生に深く関わるモチーフを提示していると推測できる。そこでまず冒頭6章に見られるジョーとマグウィッチの二つの世界の関係と、ピップに及ぼすその結果を見ていく。

マグウィッチは沼地に隣接する墓地で突如、「びっしょり水にぬれ、泥まみれになりながら」(4)姿を現す。そしてピップを一時的に解放すると、沼地の間を川の方へと歩いていく。その後彼は水と泥の中で別の囚人と格闘しているところを発見され(36)、最終的に泥だらけの岸に近い沖に、黒々とよこたわる監獄船に吸い込まれていく(72)。実際マグウィッチは、太田氏が論述するように、全編を通じて常に水に捕らわれた存在であり、その特徴は冒頭6章において既に明確に表現されている。

ディケンズの後期作品における水のイメージの暗さ(太田 220)を踏まえると、本作品中の「水、川、泥」もまた「悪鬼のような要素」(Van Ghent 132)であり「生命を吸い込む、または圧倒する」(Manlove 67)という性質を思わせる。つまりマグウィッチは最初の出現時において、死を示唆する水をまとった陰湿な存在として印象づけられているのだ。ではそれに対し、第2章から登場するジョーはいかなる存在といえるのか。当然のことながら彼はピップに「鍛冶屋」(3)と紹介された時点で、火のイメージを持つ。さらに沼地から帰宅したピップを待っていたのは、台所の炉辺に座っているジョーである。彼はその後も度々描写されるように「火掻棒で下の格子の間の火をゆっくり払い落とし、それを見つめ」(9)、暖炉の火の番を務めている。そしてこのジョーの火は、マグウィッ

手追跡劇においても活用される結果となる。

そもそもジョーがマグウィッチと出会うきっかけは、軍曹が脱獄囚捕獲のための手錠の修理をジョーに依頼したことにある。ジョーは快く承知し、さっそう仕事にとりかかる。この時の様子をピップは、ジョーが散らす火花や燃え盛る火炎と戸外の「青白さ」を効果的に対比して描写する。そしてその火を「沼地にいる私の友達の脱獄囚」(33)を捕らえようとする力の反映とみなし、寒天の下の脱獄囚の悲愴感をさらに深める。しかもジョーは手錠を修理し終わると、いつになく積極的に狩への同行を提案する(33)。さらに脱獄囚捜索中のジョーは「狩人」(34)のように敏捷な動きをし、脱獄囚が手錠を掛けられた後も松明を片手に、終わりまで見届ける意志を通すのだ。

進行されるマグウィッチは、真つ暗闇の沼地を歩きながらジョーたちが掲げる松明が、周囲の空気を温めることを喜ぶ。しかし同時にその火は、彼が再び真つ黒な監獄船へと連れ戻される道筋を示すに過ぎない。途中立ち寄った小屋の炉の火も、囚人の足を一時的に乾かすに過ぎない。荒涼とした戸外と「家の中の心地の良い火」(34)が相容れないように、どれほどマグウィッチが火の温もりを求めようとそれは束の間の幻影であり、かつ水に捕らわれた彼を脅かす道具にさえなるのだ。水の中で消える松明の火をマグウィッチと重ねるピップの描写(40)は、まさにマグウィッチの人生における安らぎのはかなさと、彼が決して闇を湛える水の力から逃れられないことを示唆している。そして脱獄囚の探索に加わるジョーは、図らずもその火の威力でもって、マグウィッチを压制する立場となっているのだ。

だがピップはすでに水の世界に取りつかれている。彼は「深い水の底に飛び込む」(10-11)決意で、マグウィッチのためにパン切れを盗もうと試みる。ピップは「私の恐ろしい知人」(10)となった脱獄囚のために、暴力的な姉の下で「共通の受難者」(8)であったジョーを欺く決意をしたのである。というも彼らは日頃からパンを食べ比べする習慣があったからだ。そのためピップはジョーが視線をそらした一瞬のすきをつき、それをズボンに突っ込まざるを得ない。ジョーはピップが「私の良心の一部分」(13)と呼称するパン切れを丸飲みしたと思いこみ、吐いたほうがいいと忠告する(11)。しかしピップはその「良心の一部分」を「屋根裏の私室」にこっそりと置きに行き(13)、ジョーの忠告は無視されてしまう。以上は日常生活におけるピップとジョーの親密さと、ピップの混乱をコミカルに描写した場面であるが、同時にジョーに対するピップの離反はこの時点から始まっているのである。

さらにジョーは、ピップがマグウィッチに共感し、陰鬱な「水」の領域に足を踏み入れることを阻む役割をする。彼らが捜索隊に参加する時、ピップはジョーに「彼らを見つけないといいねえ」と囁き、ジョーは「もし彼らが逃げ切れたら1シリングやるよ」と答える(34)。この会話やジョーの手錠修理におけ

る脱獄囚たちを哀れに思うピップの描写、また度々使用される「わたしの囚人」という語は、マグウィッチに惹かれているピップの精神状態を端的に表している。つまり彼は脱獄囚という未知の存在に恐怖を感じるものの、構築された彼らとの繋がり肯定し、同じ立場から物事を眺めはじめているのだ。だがジョーはピップの盗みを困難にし、火の勢いを借りて手錠を修理する。そしてピップの希望とは反対に、脱獄囚が捕まることを前提に返答することで、ジョーはピップと囚人の関係を打ち消そうとする。さらに搜索開始後、東風と共にみぞれが激しく吹きつけてくると、ジョーはピップを背負う(34)。なぜならそれらはマグウィッチの象徴であり²、そこでジョーはピップが雨風や泥に足を取られないように奮闘しているのである。

だがジョーの奮闘は空しいものとなる。実はジョーたちが搜索に同行する直前のミセス・ジョーの、ピップの頭が銃で粉々にされても知らないわよ、という言葉(33)と1シリングにまつわる出来事は、彼らの囚人の記憶が薄れた頃に突然再発するのだ。

それはピップが上流階級に憧れを抱き、平凡な生活やジョーに嫌気が差し始めた時のことだ。ある日ピップは村の居酒屋に行き、見知らぬ男と出会う。その男はジョーからたくみに脱走囚の話をはきだし、何度もまるで目に見えない鉄砲で狙っているかのような視線をピップに注ぐ。そしてとうとう「驚くべき狙撃」(77)をする。その男はピップだけに見えるように、ピップが昔マグウィッチに渡したジョーのやすりでもって飲み物をかき混ぜたのである。それを見たピップは帰り道、「昔の悪事と古い知人が思いがけなく出現したために、幾分かぼろっとなり、他のことは何も考えられなかった」(78)。その上この見知らぬ男はピップに1シリングを手渡す。帰宅後、その1シリングを包んだ紙が1ポンド札2枚だということが判明し、ジョーはあわてて返しに行く。しかしすでに謎の男は消えている。そこでミセス・ジョーはそのお札をティー・ポットにしまひ込み、それらは夜も昼もピップにとって昔の犯罪と結びついた悪夢となる。

ピップがそのお札について知るのには、彼がロンドンで生活し、ジョーの訪問に後味の悪さを残した翌日のことである。帰郷するピップは偶然、「目に見えぬ銃でわたしを打ち倒した男」(227)である囚人と乗合馬車を同じくする。その日は、脱獄囚を搜索した昔を思い出させる「みじめなほど冷湿」な天候であり、沼地は「冷たく湿った風」が吹きつける(228)。その道中でピップは偶然囚人たちの会話を耳にする。そして彼は例のお札の出所が、昔の囚人マグウィッチであったことを知る。

やすりの再出現により、ピップの頭が銃で撃たれたかのように朦朧となること。そして囚人からのお札を返せないジョーとミセス・ジョーの行動。またピップがうわべの紳士修業に没頭し、ジョーの炉に居場所を見出せなくなった後に、マグウィッチの湿った影が濃厚となること。これらはピップをその影から守る

うとしたジョーにとって皮肉な結果だと言わざるをえない。ジョーはマグウィッチが「囚人の世界」(227)から逃れられない運命を、1シリングを賭けて証明しようとした。しかしマグウィッチは「自由の世界」(227)におけるピップとの繋がりを1シリングどころか膨大な金額で再構築してみせたのである。

ロンドンにいるピップが精神的にも完全にジョーと離別したことは、ジョーのロンドン訪問の日に霧雨が降っていることから明白だ。なぜなら今やピップにジョーの炉は必要ではなく、それどころか彼はマグウィッチが背負う水の世界の住人になっているからである。またピップの住居はその日、「天使が隠せなかった事実」として、“some weak giant of a Sweep”のように「煤の涙」を流していた(219)と描写される。これは巨人のような「力強さ」と同時に「気弱さ(weakness)」(8)という性質を持ち、「炉床掃除(swept the hearth)」(50)や「粉炭のほこり」(107)にまみれた鍛冶屋の仕事に勤しむ、煤だらけのジョーの涙を示唆する。そしてこの日以来彼らの離別は、ジョーでさえ否定出来ない事実となってしまふ。無力な守護天使ジョーは、かつて「天使の翼」(141)のように優しく手を震わせてピップを鍛冶場から手放した。そのジョーはここに至ってもはや昔のように、ピップをかばうことは出来ない。なぜならピップは鍛冶場や家の台所のような火は決してないと知りながらも(272)、すでにマグウィッチに作られた似非紳士の道を戻れないからである。

こうしてジョーの火はマグウィッチの存在に圧倒され、ピップはジョーに代わって炉の火の前に座るマグウィッチと対面する。ピップはその男が昔の「私の囚人」であり真の「恩恵者」だと知った時、ようやく自らジョーを捨て去った事実を受け入れるのだ。

以上のように火と水のイメージはジョーとマグウィッチの人物像を際立たせ、冒頭において各々を圧制者と被圧制者にする。また火と水は、ピップの世界からの火の後退と水の浸透という形で、ピップに対する二人の関係を印象づける。しかしこのことから、彼らはピップを仲立ちとして反目し合う関係だとは断定し難い。なぜなら彼らの会話に敵意や嫌悪は微塵も感じられず、それどころか「彼ら三人だけが、慈愛に満ち他者の人間性を尊重した振る舞いをする」(Stange 67)と言えるからだ。大人たちはクリスマスの宴でピップを苛み、脱獄囚を肴に楽しむ。また軍曹たちは脱獄囚を動物のようにあしらう。ところが対照的に、ピップはマグウィッチを「私の囚人」と認識し、マグウィッチはピップをかばうために、自ら食料を窃盗したとジョーに謝罪する。するとジョーはよく食べてくれたと返答する。ジョーとマグウィッチは「善と悪」「真と偽」という全くの相反する立場にいるのではない。食料についての言及が成されたとき、三人の間には、彼らだけが理解し共有する畏怖と憐憫と共感の相互関係が成立する

のである。

ではピップの盗み自体には、どのような意味があるのか。この行為をピップ自身は罪と考え、彼の人生を犯罪と結びつける根源的な出来事とみなす。しかしその盗みの状況を考慮した場合、それは安易に責めるべきものではない。というのもピップの盗みの原因は、脅迫による恐怖心のみではないからだ。それは友も無く追われている一人の人間に対するピップの同情からも生まれている。盗みはもちろん罪であるが、同時にその罪は慈愛ある善行という側面を持ち得るのである(Stone 326)。第三者に恵むという目的が介在した時、盗みという悪の行為は与えられた側にとって恩恵となる。

ピップはマグウィッチのお金によって似非「紳士」につくられる。だがマグウィッチがピップの恩恵者になろうとした、そもそものきっかけは何なのか。マグウィッチの悲惨な生い立ちを考えると、ピップの行為は唯一彼が受けた「高潔な」(316)振る舞いだったにちがいない。ピップこそマグウィッチに「食料を与え、秘密を守った」(229)恩恵者だったのである。

しかしやすりを盗まれたジョーにとって、ピップの盗みは道徳的罪かつ忘恩行為である。ピップはマグウィッチの嘘の共犯者となり、そのためジョーを裏切ったのだ。さらにピップは別の出来事について嘘をつき、そのことをジョーに白状する。するとジョーは、原因がなにであれ嘘は結局同じ場所に戻ってくる、と彼をいさめる(71)。そしてこの言葉通り、マグウィッチと交わしたピップの嘘は、やすりの男となって再出現する。そして最終的にそのやすりを持つマグウィッチが、ジョーを捨てたピップの所に戻ってくるのだ。

恩恵者として名乗り出たマグウィッチの告白を聞き、ピップは愕然とする。ピップが汚点と考えていた過去の囚人との関係が、今の彼を作っていたのである。ピップはジョーのやすりを盗み、それをマグウィッチに与えたことで、嘘と忘恩で固めた人生を歩んでいた。そしてまた、ピップの忘恩と同時に慈愛の印であるやすりを手にいれた囚人は、それを糧に生きていたのだ。³

このように罪は同時に恩恵となり、恩恵のつもりが人生を狂わせる。では一つの行為に錯綜する意味づけの多面性について考察するにあたって、ここで注目したいのが、本作品に多用されている童話や文学作品のモチーフである。そのひとつとして、語り手は幼少の頃自分自身を「若い怪物」(69)と見なしていたと述べ、「怪物」のような召使いの少年を「復讐者」(226)呼ばわりする。これらはメアリー・シェリーの『フランケンシュタイン；または現代のプロメテウス』(*Frankenstein; or, The Modern Prometheus*, 1818)を想起させる描写表現である。また紳士として里帰りしたピップは、パンプルチュックこそ彼の恩人だとする記事を目にして、「北極に行ったとしても」そのような厚顔無恥な話を耳にするだろう(231)と、『フランケンシュタイン』の北極に集まる旅人たちを匂わせる表現をする(Crawford 630)。そして後に恩恵者の正体を知ったピップは、自分がつく

った怪物に追いかけるフランケンシュタインと比べ、「自分をつくった当の人間に追いかける」方が恐ろしい(339)と述べるに至る。

『フランケンシュタイン』は、本作品の主題の一つといえる恩恵者 被恩恵者関係、ひいては創造主 創造物関係を検討する上で、たびたび比較の対象となっている。⁴しかしここでは、本論文第1章で指摘したジョーとマグウィッチが保持する「火」と「水」のイメージと重ねて考察してみたい。すると彼ら三人の関係においても、ある神話のモチーフが浮かび上がる。それは人類の恩恵者といわれるプロメテウス神話である。

人類の起源については様々な物語があるが、その一つにプロメテウスが水と泥で人間を創造したというものが存在する。『フランケンシュタイン』の副題はこの説に由来すると思われる。またプロメテウスは火を持たない人間が夜の闇の中で恐怖におののき過ごし、物を煮たり焼いたりすることを知らないことに同情する。そこで彼は火の神の仕事場から、または太陽神の燃える車輪から火を盗み隠し、それを人間に与える。しかしその罰として、プロメテウスは鎖で巨巖に磔られ、毎日巨鷲に肝臓を啄まれることになる(呉 32-40)。

マグウィッチは冒頭で、水と泥にまみれながら出現する。また彼は一晚中間の中で「死ぬほどの寒さ」に震え、物音に「はっと驚く」(18-9)。それはまるで文明を持つ前の、闇に怯える土塊の人間の姿である。ピップはそんなマグウィッチのために、「全能」(15)の姉から巧妙に食料を盗みだす。彼はブランデーを盗んだ折、代わりに壺に水差しの水を足しておくのだが、それはまるでプロメテウスが全能のゼウスをだまそうと、白い骨を脂肉で包んだ手管のようだ。またマグウィッチはピップを脅迫するのに、少年の心臓と肝臓に手をかける連れの若い男がいると嘘をつく。ピップはその嘘を信じ、その男の存在を非常に怖れる。そのため盗みを働き沼地に戻ったピップは、別の囚人をその若い男と勘違いし、「肝臓の場所を知っていれば、そこに痛みを感じていたであろう」(18)という程に驚くのである。その上この肝臓の痛みは、ピップが数年後に恩恵者の正体を知った時の、私は「鎖を背負わされている」(322)という苦悩と恐怖につながる。これらの描写はまさに、盗みの罰として鎖で縛られ肝臓を啄ばれるプロメテウスの苦痛と重なる。

ではプロメテウスであるピップは、無知な泥人間のマグウィッチに何を与えたのか。それは火を司るジョーの仕事場から盗んだやすりであり、マグウィッチが初めて抱く生の充足感である。脱獄囚として一生を終えようとしていた彼はピップに出会い、この恩恵者を紳士にするという目標を抱く。だがその感情は、紳士の「持ち主」(321)となって、粗野な者を排斥する世間を見返すという憤怒と憎悪の念が前提となったものである。マグウィッチは紳士ピップの「創造主」(143)だが、同時にピップは復讐に燃えるマグウィッチの創造主でもあるのだ。そこで第二の人生を歩むマグウィッチを創造し放棄しようとしたピッ

プもまた、他人の力で上流階級に仲間入りする幻想に復讐される結果となる。

ピップは都合よく物事を解釈し、過去の罪の延長線上で生きていることに気づかない。しかも彼はジョーをはじめ他者の真価を見誤る、盗み以上の罪を重ねる。ではピップがマグウィッチを救済したように、罪を犯したピップを救ってくれる人物はいないのだろうか。

ジョーはマグウィッチが恩患者として現れた時点から、ピップの前に姿を現さない。彼が再度出現するのは、ピップが全てを失った後である。ジョーはピップが十分苦悶した後に、ようやく助けに駆けつけるのだ。ここでプロメテウスの呪縛がどのように解かれるのか思い出したい。彼を自由にするのはヘーラクレスである。ヘーラクレスはプロメテウスの肝臓を啄みにきた巨鷲を弓矢で射殺し、その鎖を解いてやる。そして本作品中ヘーラクレスに譬えられる人物こそ、ジョーなのである。彼は第2章でピップによって紹介される早々、「力強く、そして気弱い点から、ヘーラクレスのよう(a sort of Hercules)であった」(8)と描写される。それはジョーの身体と精神のギャップを強調しているだけでなく、彼のヘーラクレス的役割をも暗示する。ジョーがヘーラクレスに譬えられるのはこのとき限りだが、彼はその役割を最後まで果たすのだ。

ピップは恩患者についての真相を知り、絶望と共に「鎖」という言葉を連想する。続いてピップはジョーの存在を思い起こし、いまさら彼の所へは戻れないと痛感する(323)。以上のことからピップが背負う鎖とは、ジョーや己の出生を蔑ろにし、誤った目的が生んだ金銭で虚栄の道を歩んでいたロンドンでの時間を意味する。ではジョーはいかにしてピップの鎖を解くのだろうか。

マグウィッチの死後、ピップは熱病にかかり、ジョーの献身的な看護を受ける。ピップは子供に戻ったような気持ちになり、これまでの出来事は夢ではなかったかと感じる。今やロンドンに雨の描写はなく、美しい初夏の風景が広がり、ジョーはピップに慈しみの言葉を掛ける(463-68)。

このようにピップは遺産相続の見込みが露と消え、幼い頃のようにジョーの優しさに触れることで、すっかり過去をやり直せると思い込んでしまう。そして愚かにも故郷で幼なじみビディと結婚し、鍛冶屋になろうとまで考えが及ぶ。ピップは故郷に帰り時間を戻すことで、背負っている鎖から解放されると勘違いするのである。

だがジョーはピップの過去の忘恩行為を責めないからといって、彼を鎖から解放したわけではない。ジョーは時間を取り戻すことなどできないと知っており、そのまま故郷に帰ってしまうのだ。ピップは鍛冶場を訪ねるが、そこにジョーの火は見えない(478)。なぜならジョーの火は、もはやピップを必要としないからである。未来を見据えるジョーとビディは結婚し、炉辺は彼らの新しい家庭の場となる。ピップが再び台所の炉の火を目にするのは11年後であり、

ジョーの足元にはピップの腰掛に座りながら火に見入る、ピップという名の少年がいるのだ(481)。

ピップはかつてジョーの火を放棄し、マグウィッチの水に取り込まれた。そのため彼は二度とジョーの火に居場所を見出せない。ジョーは自分の子供にピップと名づけることで、ピップが幼い子供の立場に戻ることはなく、したがって永遠に過去に縛られることはないと教える。ジョーは自身の時の変化を見せることで、ピップにロンドンでの時間を否定することなく前に進むことを示し、彼の鎖を解こうとしているのである。

しかしピップは単純に、マグウィッチの復讐のために鎖を背負わされたのだろうか。ピップは遺産相続の見込み話以前から、ジョーや鍛冶場から抜け出し、金銭的に成功する機会を夢見ていた。そしてこのピップの野望をかなえた人物こそマグウィッチなのである。ならばマグウィッチもまた、ピップに知識を得る機会を与えた恩恵者プロメテウスの顔を持っていると言えよう。ピップは沼地の墓場で初めて自分と周囲の事象の「アイデンティティ」(3)を認識する。つまりピップにとって「私」とは沼地と直結した存在であり、虐げられる粗野な土塊なのである。そしてピップはこの沼地と川に象徴される村で、無学なまま鍛冶屋になるはずだった。それがマグウィッチにより、彼は村の生活にはない文明社会を知るのだ。ただし彼のピップへの愛情は復讐心でゆがんでいるため、マグウィッチは安らぎの火を与えることができない。そのため彼は結局プロメテウスにはなれず、ピップの遺産相続の見込みは「太陽の前の沼地の霧」(470)のように消滅してしまう。しかしヘーラクレースであるジョーの弓矢は、マグウィッチに対しても働きかけているのである。

先述したように、ジョーは脱獄囚捜索中の様子を「狩人」に瞥えられる。松明をかざす狩人は獲物を駆り立てる圧制者だ。しかし同時に狩人とは、すなわち弓矢の名人ヘーラクレースを連想させるものでもある。そしてマグウィッチとジョーは捜索終了後、パイについての一度限りの会話をする。

脱獄囚捜索の数時間前、ピップはマグウィッチに食料を届ける。そのときマグウィッチは少年の忠実さに触れ、のどの奥をごくりと鳴らす。続いてピップは彼がパンを食べる姿を見て、喜びの言葉を述べる。すると粗暴だったマグウィッチが「ありがとう、ぼうや(my boy)」と答え、今度はパイに食らいつく(19)。この瞬間、パイはジョーのやすりと同じく、ピップの罪と慈愛と忠誠を指し示す物になり、マグウィッチはピップを「息子(my boy)」として享受したのである。だがそのパイは、ピップを極限まで苦しめる存在ともなる。なぜなら宴の最後になって、そのパイを食することになるからだ。つまりピップにとってパイとは、始終彼を苛む盗みの罪そのものであり、マグウィッチとの秘密の接触を意味するのである。

ではなぜマグウィッチはジョーに、やすりではなくパイについて述べるのか。それはパイが、ピップに盗みと嘘の罪を背負わせ、またその罪を共有するマグ

ウィッチ自身の罪をも指しているからだ。

マグウィッチはピップと共有する罪の証であるパイを食べ、そのことをジョーに謝罪する。しかし食べてしまったパイはもう元には戻らない。ジョーはパイが示すマグウィッチの罪を元に戻そうとするのではなく、彼が罪を犯してしまう境遇を理解してその行いを責めず、哀れな人と同情を示す。そこでジョーは「あなたが何をしたかは知らないが、そのためあなたが餓死したらいいとは思わなかっただろう」(40)と答えるのである。そしてマグウィッチは予想外のジョーの許しの言葉にピップ同様の尊厳を認め、のどを再度鳴らす。

マグウィッチがこの音を最後に鳴らすのは、数年後ピップの心からの忠誠の言葉を聞いた時である(446)。ピップは彼の内に、ジョーに対する自分よりも善良な心を見て(445)、マグウィッチを愛せるようになっていたのだ。罪から生まれた人生は永遠には続かず、マグウィッチの遺産は国が没収する結末となる。しかし死に向かうマグウィッチには、ジョーによって他者への寛容を知ったピップの深い愛情が残されるのである。

マグウィッチが初めて自分自身に気づいたのは、カブを盗んだ時であったという。その時の記憶を彼は、連れの男が「火を持って」逃げ出したため、残された彼は「非常に寒かった」と語る(346)。マグウィッチの身体を温める火は、彼の人生の出発点からすでに手に入らなく、彼は常にびしょぬれの姿で寒さに震えている。同じくピップも、もの寂しい墓地で一人震えながら自分自身を認識する。彼らは社会における孤独な追放者であり、互いに共感を抱くのには不思議はない。そしてジョーもまた、暴力的な父親を持ち、両親の死後は「一人ぼっち」で「寂しい」生活を送った無学な人間である(46-7)。彼ら三人は互いに罪と恩恵と赦しの関係を築く。冒頭6章に描写されるピップの盗みと、その一応の決着としてなされるジョーとマグウィッチの会話には、彼らがその後展開する罪と罰と赦しの過程が暗示されているのである。

注

- この言葉は、幼いピップが脱獄囚マグウィッチに投げた別れの挨拶でもある(6)。
- 数年後、マグウィッチが恩恵者としてピップの前に現れる日も、東風が吹く嵐の日である(312)。
- ピップの罪と囚人とのつながりを、マグウィッチの「足かせ」と併せて論じる(Van Ghent 133, Barnard 240-41)ものもあるが、本論文ではジョーに対するピップの罪を考慮するため、やすりに注目する。
- 例えば、Jay Stubblefield, “‘What Shall I Say I Am, To-Day?’: Subjectivity and Accountability in *Frankenstein* and *Great Expectations*,” *Dickens Quarterly* 14 (December, 1977): 232-42; Iain

Crawford, "Pip and the Monster: The Joys of Bondage," *Studies in English Literature* 28 (1988): 625-48; Jerome Meckier, "Dickens, Shelly's *Frankenstein*, and the Importance of *Paradise Lost* to *Great Expectations*," *The Dickensian* 98 (2002): 29-38.

参考文献

- Barnard, Robert. "Imagery and Theme in *Great Expectations*." *Dickens Studies Annual* 1 (1970): 238-51.
- Dessner, Lawrence Jay. "*Great Expectations*: 'the ghost of a man's own father.'" *PMLA* 91.3 (1976): 436-49.
- Dickens, Charles. *Great Expectations*. Ed. Charlotte Mitchell. Harmondsworth: Penguin, 1996.
- Hagan, John H, Jr. "The Poor Labyrinth: The Theme of Social Injustice in Dickens's *Great Expectations*." *Nineteenth-Century Fiction* 9 (November 1954): 56-63.
- Hutter, Albert D. "Crime and Fantasy in *Great Expectations*." *Critical Essays on Charles Dickens's Great Expectations*. Ed. Michael Cotsell. 1970; Boston: G. K. Hall, 1990. 95-103.
- Manlove, Colin N. "Neither Here nor There: Uneasiness in *Great Expectations*." *Dickens Studies Annual* 8 (1980): 61-71.
- Sadrin, Anny. "Dickens's disinherited boy and his great expectations." *Parentage and Inheritance in the Novels of Charles Dickens*. Cambridge: CambridgeUP, 1994. 95-120.
- Stange, G. Robert. "Expectations Well Lost: Dickens's Fable for His Time." *Critical Essays on Charles Dickens's Great Expectations*. Ed. Michael Cotsell. 1954; Boston: G. K. Hall, 1990. 63-73.
- Stone, Harry. "*Great Expectations*: The Fairy-Tale Transformation." *Dickens and the Invisible World: Fairy Tale, Fantasy, and Novel-Making*. Bloomington: Indiana UP, 1979. 299-339.
- Van Ghent, Dorothy. "On *Great Expectations*." *The English Novel: Form and Function*. New York: Rinehart, 1953. 125-38.
- 太田素子 「マグウィッチと水のイメージ」 『チャールズ・ディケンズ』 『大いなる遺産』 読みと解釈』 松村昌家編，東京，英宝社，1998. 219-36.
- 呉茂一 『ギリシア神話』 東京，新潮社，1970.
- 田辺洋子 「*Great Expectations* 論：視点の交錯」 『ディケンズ後期四作品研究』 東京，こびあん書房，1999. 161-349.